
覗くな、狂うぞ。
ジョン・カーペンター
マウス オブ マッドネス
JOHN CARPENTER'S
IN THE MOUTH OF MADNESS
NEW LINE PRODUCTIONS PRESENTS SAM NEILL JULIE CARMEN JURGEN PROCHNOW JOHN CARPENTER'S IN THE MOUTH OF MADNESS WITH CHARLTON HESTON SPECIAL MAKE-UP EFFECTS BY KURTZMAN, NICOTERO & BERGER EFX GROUP.INC. SPECIAL VISUAL EFFECTS BY INDUSTRIAL LIGHT & MAGIC
MUSIC BY JOHN CARPENTER & JIM LANG PRODUCTION DESIGNER JEFF STEVEN GINN EDITO EDWARD A.WARSCHILKA DIRECTOR OF PHOTOGRAPHY GARY B.KIBBE ASSOCIATE PRODUCER ARTIST ROBINSON WRITERS BY MICHAEL DE LUCA PRODUCED BY SANDY KING DIRECTED BY JOHN CARPENTER
© MCMXCIV NEW LINE PRODUCTIONS.INC. ALLRIGHTS RESERVED.
DOLBY STEREO
NEW LINE CINEMA



INTRODUCTION

■イントロダクション

「この映画はある一定の精神の均衡を保ってご鑑賞いただきたい。」
ジョン・カーペンター

不安な世紀末を迎える今、画期的で新感覚の“サイコパス”映画が誕生した。

人間の創造の産物でしかない小説が、邪悪で狂気の力を得て、現実の世界を次々と変えていくとしたら……我々（観客）が映画『マウス・オブ・マッドネス』の主人公と共に虚構の世界に入り込んでいくとしたら……そして現実と虚構の区別がなくなってしまったら……果して人間はどんな精神状態に陥るのか？　これは『ハロウィン』『ニューヨーク1997』で知られるＳＦホラー映画の鬼才ジョン・カーペンターが、世紀末の人間に提示した狂気の映画である。

世界中で翻訳されている、今世紀最高の驚異のベストセラー作家サター・ケーンが描く、問題の狂気小説は、読者にこんな症状を引き起こしていく。「まず恐怖の解剖学的構造において、とても信じられない恐ろしさで読者を狂気に駆り立てる。ストーリーはゾッとさせるほどリアルに満ちていて、痛烈に肉体的且つ精神的な症状を引き起こす。例えば頭痛、憂鬱、分裂症さえも……そして読者は邪悪な世界に飲み込まれていくのだ」



事件は、皮肉屋で猜疑心の強い保険調査員ジョン・トレントが、失踪したケーンの行方を捜し、彼の新作小説「マウス・オブ・マッドネス」の原稿を受け取ってくるよう依頼されたことから始まる。やがて彼は編集者のリンダ・スタイルズと共に、ケーンの小説に書かれている、ホブス・エンドという架空の町にたどり着き、そこで現実を自由に変えることができるケーンの存在を知る。ケーンは人類を滅ぼし、新しい世界を創造して神になろうとしているのだ。

“現実はたえず形を変えている”

トレントは、この事実を体験し、ケーン創造のマウス・オブ・マッドネス（狂気の淵）に迷い込んでしまい、現実と虚構の境界線のない現実に苦しむことになる。更にラストで彼は、自分自身がケーンの野望を実現させるための《最重要人物である驚愕の真実》を知らされるのである。トレントは、その真実によってアイデンティティーはおろか、精神が崩壊してしまうのだ。

映画観客も、映画『マウス・オブ・マッドネス』の主人公トレントを自分に置き換えて観ていくことで、ケーンの狂気の世界に入り込み、恐怖を体験し、狂気に陥っていくことになる。かつて狂気を描いた映画はたくさんあったが、狂気を生む映画は存在しなかった。映画の常識を覆した物語が進行していくうちに、二重三重に隠された恐怖の構造が、トレントの精神と観客の感性を刺激していく。映画『マウス・オブ・マッドネス』は、客観的に楽しむ娯楽映画から、観客を狂気に陥れる革新的な映画に変貌していく。

IN THE MOUTH OF MADNESS



「カーペンター以外に、この映画を撮れる監督はいない」と本作の脚本家兼製作総指揮のマイケル・デ・ルカは断言する。

カーペンターは、『要塞警察』『遊星からの物体X』『ゼイリブ』などで人間の心の闇に潜む恐怖を描き続け、ホラー映画の傑作を次々と放ってきた。間違いなく本作は、彼の恐怖のフィルモグラフィーの最高傑作の部類に入るだろう。

スタッフには、カーペンターが常に信頼をおいているカーペンター映画常連の顔が並ぶ。製作は『スターマン／愛・宇宙はるかに』以降のカーペンター映画に参加しつつ、プライベートではカーペンター夫人を務めるサンディ・キング、撮影は『パラダイム』『ゼイリブ』のゲーリー・B・キッビ、特殊視覚効果は『透明人間』のＩＬＭ、特殊メイクは『ボディ・バッグス』のＫＮＢエフェクツが担当している。特にＫＮＢエフェクツがクリエイトした数多くの異形の怪物たちは大きな見どころの一つだ。カーペンターはまた自作の音楽を手がけることでも有名で、『ボディ・バッグス』で組んだ新たな音楽のパートナー、ジム・ラングの協力によって、不気味で且つリズミカルなサウンドを作り出している。

カーペンターの狂気のビジュアルを完璧にするために、演技陣にもカーペンター支持者が集まった。ジョン・トレント役は『ジュラシック・パーク』『ピアノ・レッスン』の名優で知られるサム・ニール。彼は91年の『透明人間』でカーペンター監督と一緒に仕事をし、意気投合。監督に惚れ込んで、狂気に陥るという難役に挑戦し見事に演じ切った。神になることに執着する恐怖小説家サター・ケーン役には、『U・ボート』『ボディ』のユルゲン・プロホノフが扮し、抑制の利いた演技でカリスマ的人物にリアリティを与えている。リンダ・スタイルズ役は、『グロリア』『ミラグロ／奇跡の地』のジュリー・カーメンで、彼女は以前からカーペンターが描く気丈なヒロイン役に関心を示し、遂にそれが実現したのである。尚『ベン・ハー』『十戒』で知られるオスカー俳優チャールトン・ヘストンが、存在感あるアルケイン出版社のハーグロウ役を好演しているのも忘れられない。

いま、カーペンター渾身のサイコパス映画『マウス・オブ・マッドネス』によって、ホラー映画は新たな領域に入る！





■ジョン・トレント■
サム・ニール

世界的に有名なホラー小説家の失踪を調査しているうちに、幻想と現実が入り乱れた、人間の運命を左右するような不可思議な世界へ誘い込まれてしまう皮肉屋の保険調査官ジョン・トレントを演じている。ニールは、商業的にも成功し、批評家の受けもよかった2つの作品、業界史上第2位の興行収益を上げたスティーブン・スピルバーグの作品「ジュラシック・パーク」と、今年のカンヌ映画祭で賞を獲得した、ニュージーランドの彼の故郷で撮影されたドラマで、トロント映画祭、ニューヨーク映画祭でもお目見えしたジェーン・カンピオンの作品「ピアノ・レッスン」が各方面で絶賛されていることを喜ばしく思っている。

ニールが世界的にもトップクラスの俳優になったのは、「わが青春の輝き」「夢の涯てまでも」「レッドオクトーバーを追え」「デッド・カーム 戦慄の航海」「普通の女」「Death in Brunswick」、そしてジョン・カーペンターの「透明人間」といったキャリアを積んだからである。その他の出演作品には、「テロリストたちの夜 自由への挽歌」(1977年のデビュー作)「プレンティ」「特別奇襲戦隊・Z」がある。

ニールは、「A Cry in the Dark」のメリル・ストリープの相手役でオーストラリア映画協会賞を獲得し、「Death in Brunswick」で最優秀演技賞にノミネートされた。また、テレビシリーズ「Reilly, Ace of Spies」でゴールデングローブ賞、イギリスBAFTA賞にノミネートされた。その他にもHallmark Hall of Fameのテレビ映画「One Against the Wind」と、最近アンジェリカ・ヒューストンと共演した、自閉症の子供の心を開こうと奮闘する父親を演じたABCの「Family Picture」でもゴールデングローブ賞にノミネートされている。



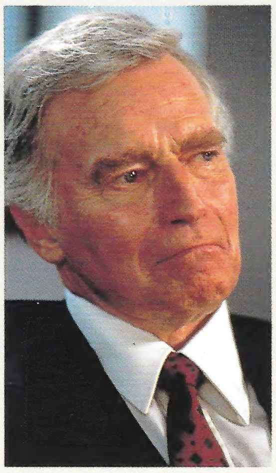
■リンダ・スタイルズ■
ジュリー・カーメン

長い間世界が待っていたサター・ケーンの最新作「In the Mouth of Madness」が人間の不吉な未来を示唆していると信じているアーケイン出版の優秀な編集者リンダ・スタイルズを演じている。

カーメンは数多くの映画、テレビ番組、舞台に出演している。ジョン・カサベテスの「グロリア」に出演し、ベニス映画祭で最優秀助演女優賞を獲得している。

その他の出演映画に、ロバート・レッドフォードの「ミラグロ 奇跡の地」、「フライトナイト2」「ブルー・シティ 非情の街」「ジャグラー ニューヨーク25時」「愛と哀しみの十字架」「Paint It Black」「コールド・ヘブン 悪夢の再会」「セックスと殺しとサルサ」がある。

テレビ番組では、Showtimeの「The Neon Empire」「Curacao」「Drug Wars II」「Finding Your Way Home」「The Freddie Prinze Story」「Fire on the Mountain」「Search for the Nightstalker」、TNTの「Billy the Kid」といったテレビ映画やミニシリーズにも出演している。



■ジャクソン・ハーグロウ■
チャールトン・ヘストン

アカデミー賞男優のチャールトン・ヘストンは、ホラー小説家サター・ケーンの失踪に巻き込まれたアーケイン出版のハーグロウ役を演じている。

ヘストンは、「ベン・ハー」(1959年にアカデミー最優秀主演男優賞を獲得)、「エル・シド」「地上最大のショウ」「華麗なる激情」「十戒」「大いなる西部」「北京の55日」「偉大な生涯の物語」「黒い罠」「大将軍」「猿の惑星」「カーツーム」といった40以上にも及ぶ映画に出演している大御所である。

その他の出演作品には、「大地震」「宝島」「ワイオミング」「パニック・イン・スタジアム」「ソイレント・グリーン」「地球最後の男オメガマン」「原子力潜水艦浮上せず」「大いなる決闘」「ウィル・ペニー」「エア・ポート'75」「ハイジャック」「三銃士」「ナンバーワン物語」「ダンディー少佐」「The Private War of Major Benson」「大海賊」「Pony Express」、そして1950年のデビュー作品「Dark City」がある。最近では「トゥームストーン」に出演している。

CAST PROFILE

■キャストプロフィール



■サター・ケーン■
ユルゲン・プロホノフ

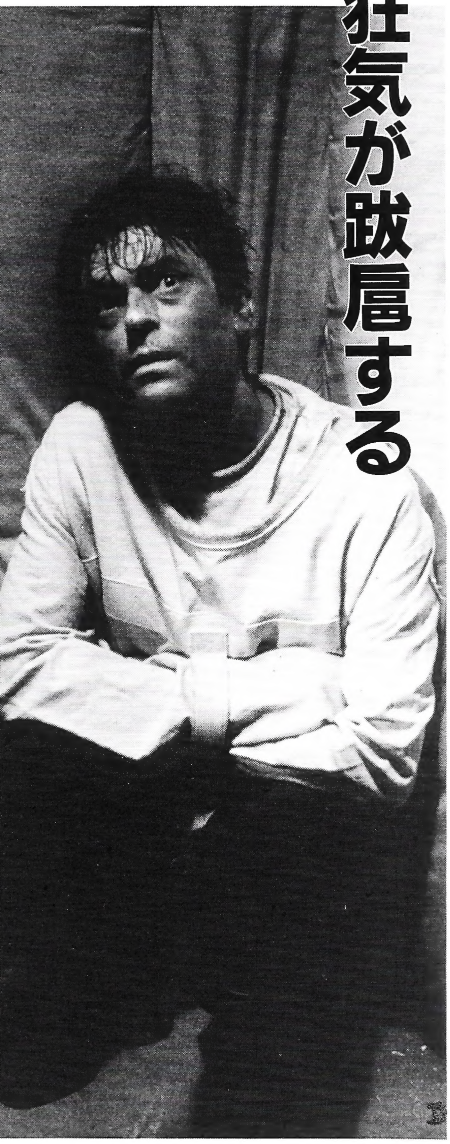
ドイツ人俳優のユルゲン・プロホノフは、人間の新しい現実を予言する恐ろしいフィクション小説を書いた、人気の予言者的作家サター・ケーンを演じている。

プロホノフは、ベルリン・ゴールデンカメラ賞を獲得したウォルフガング・ペーターゼンの作品「U・ボート」で第2次世界大戦のUボートの指揮官を演じ、ベルリン最優秀主演男優賞を獲得し、世界的にも賞賛される俳優になった。

それ以来プロホノフは、「BODYボディ」「白く渇いた季節」「ザ・キープ」「ビバリーヒルズコップ2」「対決」「第七の予言」「Come-back」「デビルズ・パラダイス 悪魔の楽園」「The Man Inside」「デューン 砂の惑星」「ツインピークス ローラ・パーマー最後の七日間」、FOX-TVの「Robin Hood」、HBOの「Forbidden」といった映画・TVに出演している。

現実と虚構を狂気が跋扈する





『ハロウィン』以降、『ザ・フォッグ』、『ニューヨーク1997』、『遊星からの物体X』と相次ぐヒットにより、ホラー・ブランドとして、「ジョン・カーペンター」の名声は世界に鳴り響いたものだったが、このところその名声にいささか陰りがでていたことを認めなくてはならない。ひとりカーペンターの問題ではなく、ホラー・ジャンル全体が一種の構造不況のごとき状態に陥ってしまったのである。原点回帰のように、ドラキュラ、フランケンシュタインものの大作が登場してきたが、あれは少しホラーの文脈が違うのだ。ジャンク（クズ）・ジャンルのプライドとアイデアを賭けたインディ系が元気でなくては、そもそも逸脱を命とするこのジャンルが好況とはいえないのである。H・F・セイントのベストセラー小説『透明人間』の映画化などホラーのボーダー・ライン突破を試みたりしたが、これは「カーペンター」のブランド・イメージをあいまいにしただけだった。言っておくが作品の品質が低下したわけではない。実際、彼の作品を並びあげれば、その品質管理の確かさに感嘆するはずだからである（ちなみに筆者のフェイバリットは、おそらく一番意味なく楽しい『ゴースト・ハンターズ』となる）。『ゼイリブ』（88年）以来、ホラーから遠ざかっていたかのごときカーペンターだが、94年になって彼の名前がまたしても頻繁に囁かれるようになる。これは、主として輸入レーザー・ディスク愛好者の間においてだった。タランティーノも絶賛の初期作品『要塞警察』のノートリミング完全版に端を発して、『ニューヨーク1997』ディレクターズ・カット版、『ハロウィン』のコレクターズ版と続々リリースされたのである。『ゼイリブ』以来、久しぶりの純ホラー・ジャンル作品となったTVオムニバス『ボディ・バッグス』もビデオ発売された。これは、『悪魔のいけにえ』のトビー・フーパーとのカップリングがわずかの話題となったが、このカップリング、とりようによっては最盛期を体験した漫才コンビの場末の劇場での復活を思わせ、いささか涙も誘われたのである。なにか縁起でもないことを、晴れやかであるべき場でじとじと洩らしている気がしないでもないが、それは次の一言を声高に宣言するためと了解されたい。

「大丈夫！　カーペンター健在なり！」

現実／非現実の皮膜に縦横にメスを入れたスリリングな新作『マウス・オブ・マッドネス』をもって復活してきたのだ。しかも、あの傑作SF『光る眼』のリメイクにもすぐにクランク・インという精力ぶりである。

ちなみに、『マウス・オブ・マッドネス』はジャンルへの帰還か？　という『ファンゴリア』誌のインタビューに、いささか憤然として、俺はジャンルから離れたことは一度もない、と答えている。

『マウス・オブ・マッドネス』の撮影中の依頼にもかかわらず、特殊メイク・アーティストにスポットをあてた本『BEHIND

映画評論家 **滝本　誠**

THE MASK』の序文をカーペンターが喜んで書いたのはまさにホラー・ジャンルへの愛からにちがいない。

さて、ザ・マウス・オブ・マッドネス、狂気の入口にて。宣伝用として配布されたスティールでもっともショッキングなものは、私立探偵のサム・ニールが体中に十字を描いた「耳なし芳一」状態で病棟にうずくまっている、というものである。彼に何が起こったのか？映画を見て意味が分かった。サムは芳一のように肉体（の一部）を黄泉の国へ運びさられるわけではない。彼は無事だ？　ただ、もっと悪いことが起こる。運びさられるのは……なのだ。なかなかにユニークなアポカリプス・ヴィジョンなのである。もっとも楳図かずおにはすでに——。

『ザ・マウス・オブ・マッドネス』のストーリー構造には二人のホラー作家がかかわっていて、これはホラー小説ファンには嬉しいサービスといっていい。一人はクトゥルー神話の創生者H・P・ラヴクラフトであり、もう一人はモダン・ホラーのベストセラー作家スティーヴン・キングである。ラヴクラフトはカーペンターが学生時代から熱愛する作家で、初期のインタビューでは「壁の中の鼠」を映画化したいと語っていたものである。神によって追放される前に地球を支配していた邪悪な旧神たちがおりあらばと再支配の気配を見せる、というのがクトゥルー神話の骨子で、このアイデアが映画のクライマックスにかかわってくる。ぬらぬらと見るをはばかるグロテスクで鈍重そうなそのお姿！

謎の失踪をとげるホラー作家サター・ケインの小説の発売日はこれを買い求めようとする人々で暴動がおこるのだが、この描写がリアリティをもって観客に訴えるとすれば、ここ20年のアメリカ読者のキング小説への熱狂があるからである。映画では「キングよりも売れている」とわざわざ語らせ、サター・ケインのリアリティを補強するのだ。本を読むものを狂気にかりたてるサター・ケインの小説はヴィデオドロームならぬブックドロームである。「世界」の死が彼の小説にすでに「ネクロノミコン」として書かれていたら？「世界」が小説を後追いしたら？こうして、現実が虚構に吸収される、胡蝶の夢のホラー版がたちあがるのである。こうしたストーリー・ラインを断ち切りジグザグ模様を描かせるのが、これはそもそもすべてがサム・ニールの「幻覚」ではないか？という目くらましだ。そして、ラストでカーペンターが仕掛けた、映画内映画というか、それを見るわれわれをも巻き込む映画外映画？の入れ子構造の幻惑性。ともあれ、カーペンターが見る側のアタマの攪拌を狙って存分に楽しんだのが、この『マウス・オブ・マッドネス』である。いい機会だ、こちらもアタマに指をいれてグチョグチョしてみようよ。







STORY
■ストーリー

まるで刑務所のような精神病院。患者トレント(サム・ニール)を訪れたウレン博士(デヴィット・ワーナー)は彼の話に耳を傾ける。何かとてつもない予感を感じながら——。

事件は熱狂的な支持者を得る恐怖小説家サター・ケーン(ユルゲン・プロホノフ)が蒸発した時から始まった。

疑り深く皮肉屋の保険調査員トレントが、いつものようにひと仕事を済ました後、カフェで知人と雑談していると、いきなり斧を持った男が襲いかかった。その男の瞳は奇妙な色と形をしており、完全に狂っているようだ。狂人は「サター•ケーンの本は読んだかね?」とトレントに話しかけた次の瞬間、警官によって射殺される。

その夜、トレントが自宅でテレビを見ていると奇妙なニュースが目に入る。街のあちこちの本屋で、ケーンの多くの熱狂的信者が、新刊『マウス・オブ・マッドネス』の発売を待ち切れず暴動を起こしたというのだ。

翌日、トレントはアルケイン出版社のハーグロウ(チャールトン・ヘストン)から、ケーンの行方を捜して、『マウス・オブ・マッドネス』の原稿を一刻も早く受け取るよう依頼される。そこでケーンに最後に出会った人物は彼のエージェントであり、先日トレントを襲った男と同一人物であることが明らかになる。

トレントが、参考のためにケーンの小説を買おうと本屋に立ち寄ってみると、店員が暴動で散乱した書籍の整理に追われていた。ケーンのコーナーにトレントが立ち寄ると、鼻の下とアゴに痣のできた青年がジッと彼を見つめ、「私には見える」と呟いた。気にしないように本屋を出たトレントは、自宅近くの路地裏で、体軀ががっちりした警官がある男を一方的に殴り付けている光景を目撃する。近くの壁には、スプレー文字で"私には見える"と描いてあった。

その夜トレントは、手がかりをつかもうとケーンの本を疲れるほど読み続けた……。

夢から目覚めたトレントは、何かの力に誘われるようにして本のカバーを切り取った。それをパズルのように組み合わせてみると、ニューイングランドの古い町を指している地図であることを発見したのだ。

トレントは、アルケイン出版社のケーン担当の女性編集者リンダ・スタイルズ(ジュリー•カーメン)と共に、目的の場所を捜しに出かける。夜中、車を運転していたスタイルズは、トレントが居眠りをしている間に不思議な幻覚に襲われ、それが消えた時、彼らの目前にケーンのどの小説にも出てくる架空の町ホブス・エンドが現われた。

ケーンの小説に書いてある通り、その町にはピックマン・ホテルがあり、女主人ピックマンがいて、ホテルの窓からはビザンチン調の大きな教会が見える。

二人は早速、教会に出かけていき、本で描かれているのと全く同じ光景を目撃する。ライフルを持った町の男性たちが教会に集まり、ケーンに自分たちの子供を返せと迫る。教会の扉が開き、可愛い子供が現われたかと思うとそれがケインに変わり、ドーベルマンが男たちに襲いかかる。目の前で繰り広げられる恐ろしい光景に驚いたトレントは、これはあきらかに出版社側の宣伝ではないかと疑うが、スタイルズは現実であると言いはる。

その夜、スタイルズは一人で教会へ出向き、ケーンから恐ろしい真実を知らされる。「かつて地上を支配していた怪物たちは、密かに地上復活を願い、私に現実を変える力を与えてくれた。私の書く世界が現実になるのだ。私は神になる……」ケーンは既に異形の怪物と化していて、スタイルズは彼の邪悪な力に魅せられてしまう。

ピックマン・ホテルに戻ってきたスタイルズのただならぬ精神状態を察したトレントは助けを呼ぼうとして地下室に降りると、奇怪な触手が生えたピックマン夫人を目撃する。ついでスタイルズも怪物と化し、慌てて表通りに逃げれば、そこには町の住人が怪物の集団となっていた。トレントはホブス・エンドを脱出しようと試みるが、行けども行けども同じ場所に戻ってしまう。恐怖の連続にトレントの精神はいまや崩壊寸前。

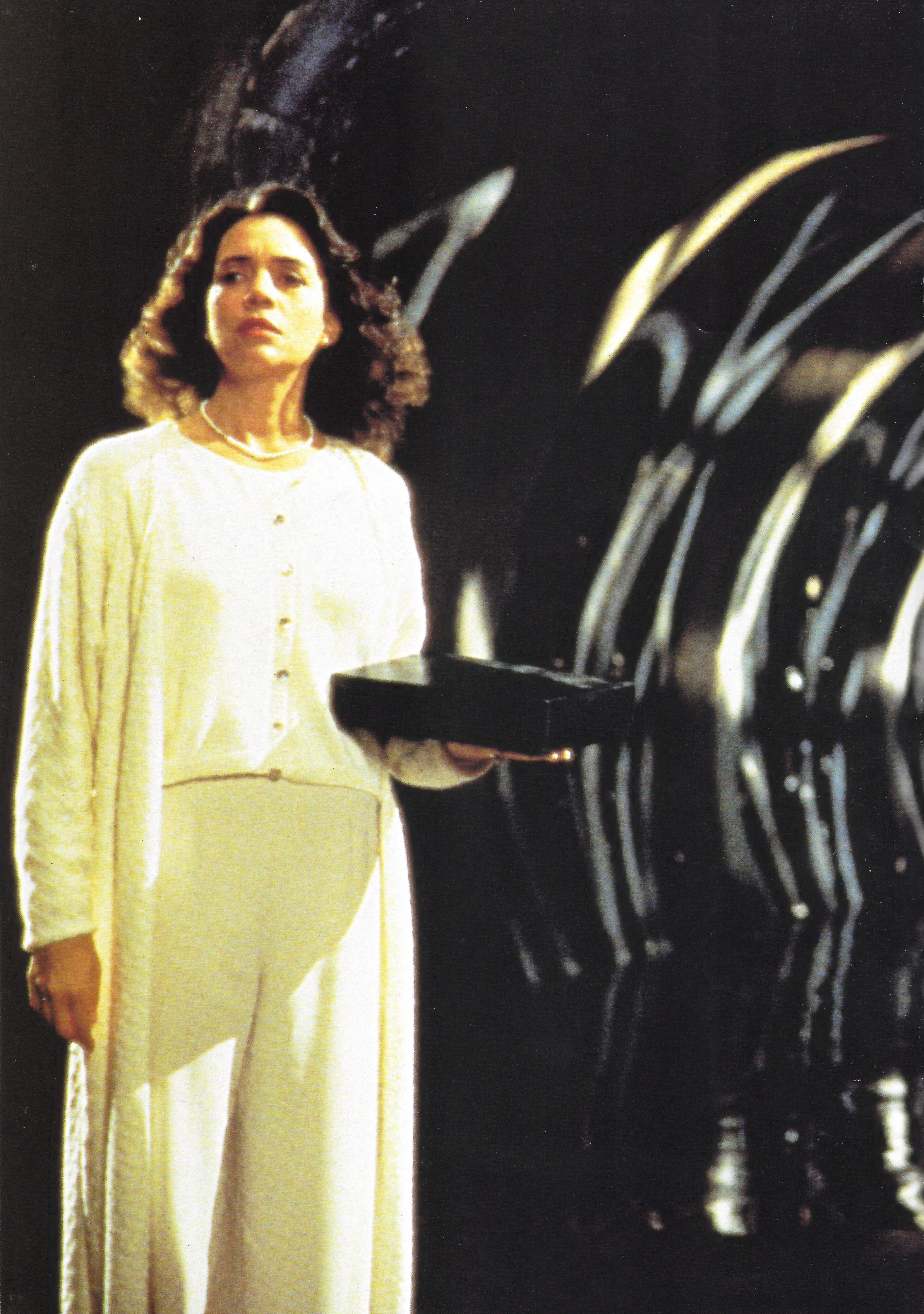
気絶したトレントが目覚めてみると、そこは教会の中で、ケーンとスタイルズが待ち構えていた。ケーンはトレントに、書き上げたばかりの恐怖小説『マウス・オブ・マッドネス』を持ち帰れと言う。そして「この本を読んで信じる人間が多ければ多いほど邪悪な力が強まり、怪物たちが地上に復活する日は近くなる」と言うのだ。更に『マウス・オブ・マッドネス』の主人公はトレント自身であることも告げ、今まで彼が体験した恐怖は、『マウス・オブ・マッドネス』の狂気の世界であることを知らされる。ケーンのエージェントがトレントを殺そうとしたのは、『マウス•オブ・マッドネス』の主人公が死ねば、この小説が存在しなくなると考えたからだ。『マウス・オブ・マッドネス』は、人間を滅亡させ、新たな世界を作るための邪悪なバイブルだった。ケーンは自らを闇の世界を開ける扉と同化し、闇に潜む怪物たちを地上に解放する……。

怪物たちから必死で逃げるトレントが横転して気が付いてみると、そこは普通の田舎道だった。手に持っていた『マウス・オブ・マッドネス』の原稿を捨てたり、燃やしたりするが、なぜか彼の手もとに戻ってきてしまう。トレントはハーグロウを訪ねて事情を説明するが、ハーグロウはスタイルズという女性は知らないし、原稿は既にトレントから受取って、『マウス・オブ・マッドネス』はベストセラーの記録を更新中だと言う。しかも既に映画化され間もなく公開されるというのだ。

街の本屋では『マウス・オブ・マッドネス』を買う人々が長い行列を作っていた。トレントは、『マウス・オブ・マッドネス』を読む青年にいきなり斧を振りかざす。その青年の瞳はケーンのエージェントの瞳と同じであった。

トレントの話を聞き終えたウレン博士は、きっと助けに戻ると言って、病室から出ていくが、彼の話は信じられるものではなかった。

やがてトレントの病室の外で、異様な悲鳴や絶叫が乱れ飛び、しばらくして静寂が戻った。病室を出てみると、何かが起きたためにあらゆる物が散乱し、鮮血がそこらじゅうに飛び散っている。これは現実なのか、幻覚なのか、精神が定まらないトレントは街に向い、映画『マウス・オブ・マッドネス』を上映している映画館を見つける。そこで誰もいない客席で独り、自らが主人公になった映画を観て、狂気の笑い声を上げるのだった……。





■特殊効果
インダストリアル・ライト&マジック

多くの技術的、創造的革新を放っているIndustrial Light&Magicは、1975年にジョージ・ルーカスが設立し、ビジュアルエフェクトの革命を起こし、映画の歴史において最高の、想像を超えた映像を創りだす集団である。

90本以上に及ぶ関連作品には、アカデミー最優秀特殊効果賞を獲得した作品が12本、オスカー技術賞を獲得した作品が５本、イギリスアカデミー賞を獲得した作品が６本もある。

ILMの映像マジックは、「ジュラシック・パーク」「E.T.」「ロジャー・ラビット」「永遠に美しく」「アビス」、インディ・ジョーンズ３部作、「フック」「スタートレック6」「ターミネーター2」「バックドラフト」「ゴースト ニューヨークの幻」「ゴースト・バスターズ2」「ウィロー」「ニューヨーク東8番街の奇跡」「インナー・スペース」「イーストウィックの魔女たち」「ヤング・シャーロック　ピラミッドの謎」「バック・トゥ・ザ・フューチャー」パート1、2、3、「コクーン」「ダーク・クリスタル」「ポルターガイスト」「ドラゴン・スレイヤー」、その他数えきれないほど多くの作品で見ることができる。

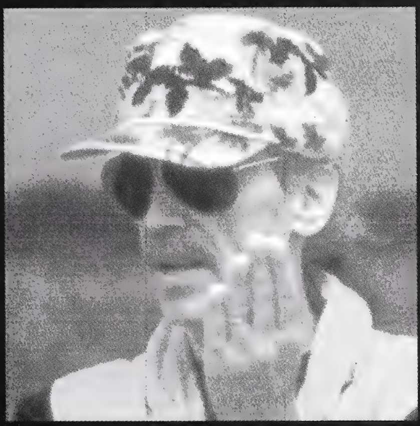
最近では「フリントストーン モダン石器時代」「マスク」「シンドラーのリスト」を手掛けている。また、テレビ映画「イウォーク・アドベンチャー」「エンドアの戦い」でエミー賞を獲得している。

STAFF PROFILE

■スタッフ・プロフィール

■脚本
マイケル・デ・ルカ

「In the Mouth of Madness」はNew Lineの製作部取締役マイケル・デ・ルカの２番目の脚本作品である。１番目の作品はNew Lineの人気ヒットシリーズ「エルム街の悪夢」の最後の作品である「エルム街の悪夢 ザ・ファイナルナイトメア」である。デ・ルカは学生アルバイトとして最初New Lineのニューヨーク事務所で働いた。ニューヨーク大学Tisch校で映画学を修得してからNew Lineに就職し、フルタイムで働くようになった。



■監督
ジョン・カーペンター

本作はジョン・カーペンターの16番目の監督作品である。カリフォルニア大学の映画学科在籍中に撮った1970年のショート作品「The Resurrection of Bronco Billy」でアカデミー賞を獲得した後、低予算で高収益を上げ、批評家にも賞賛された「ダーク・スター」「要塞警察」、予算がたったの30万ドルだったにも関わらず、全世界の興行収益は7,500万ドル以上にも達した「ハロウィン」といった作品を次々と製作した。

「ハロウィン」の成功を受けて、さらに「ザ・フォッグ」「ゼイリブ」「パラダイム」「クリスティーン」といったヒットジャンルの作品を作り、名声を不動のものにした。また、アクション映画監督としても「ニューヨーク1997」や「遊星からの物体X」「ゴーストハンターズ」といった作品で知られている。

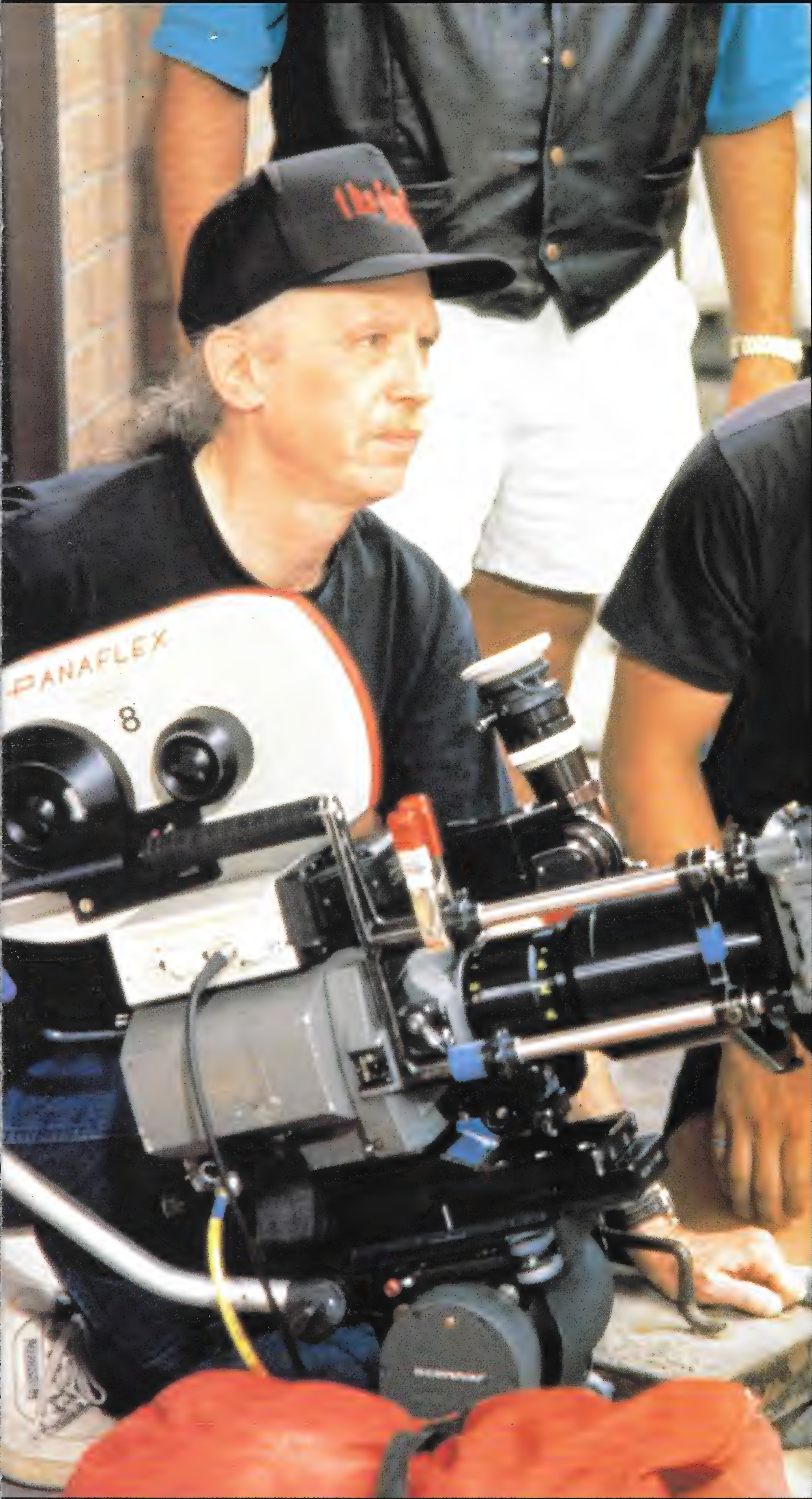
その他の作品には、コメディスリラーの「透明人間」、SFラブストーリー「スターマン」といったものがある。また小シアター向けに「Someone's Watching Me」や伝記物の「Elvis」も監督している。

脚本家としてもカーペンターは「アイズ」という作品を書いている。また「ハロウィン2」「フィラデルフィア・エクスペリメント」「ブラック・ライダー」、テレビ向けウェスタン物「El Diabio」の脚本も書いている。現在カーペンターはShowtimeのホラーオムニバスシリーズ「ボディ・バッグス」のホスト（兼監督）としても出演している。

INTERVIEW

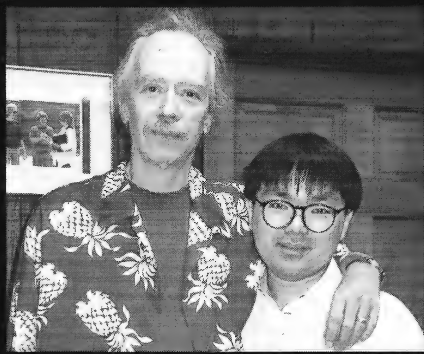
【監督インタビュー】

マウス・オブ・カーペンター



映画評論家 **鷲巣義明**

以下は、新作『マウス・オブ・マッドネス』について、監督のジョン・カーペンターにインタビュー取材（94年7月に彼のオフィスにて）を行ったものです。本作の狂気と恐怖の骨格について触れていますので、できるだけご覧になってから、お読み頂ければと思います。



ジョン・カーペンター監督と筆者

──『マウス・オブ・マッドネス』が、ニューラインシネマのマイケル・デ・ルカより脚本を最初に持ち込まれた時期はいつですか。

「まず88年にその脚本を読みました。その時は読んで気に入らなかったわけではなくて、読んでみてイマジネーション溢れる作品だと思ったし、奇妙なホラーだと感じました。その前に２作続けてホラー映画(『パラダイム』『ゼイリブ』)を撮っていたんで合間に違ったジャンルの映画を撮ってみたかったのです。その後に92年の暮れに、もう一度改稿された脚本が持ち込まれ、決心しました」

──一度断った理由は、ホラー監督としてのイメージを拭い去りたかったからですか。

「私は自分のホラー監督のイメージをこの先絶対、拭い去れるものじゃないと思ってます」

──最初に持ち込まれた脚本は、どんなものでしたか。

「最初の脚本の段階から、ラブクラフトの小説に敬意を払って書かれたものです。この作家は1930年代に亡くなりましたが、素晴らしく恐ろしいホラーを書く人で、エドガー・アラン・ポーにも匹敵する人です。今世紀最も偉大な作家の一人でしょう」

──『マウス・オブ・マッドネス』のタイトルにすごくインパクトを受けます。どのような意味合いを込めたのでしょうか。

「アブノーマルで奇妙なタイトル、とにかく人の注意と関心を魅こうとしました。それとジョン・トレントが喉の奥を逃げているような、それでいて誰かが追っかけてくるような、そういう視覚的なイメージを意識しました。トレントの“叫び”、精神異常者の“叫び”を感じさせたかったのです」

──だから精神病院のフロアや、教会の中に

INTERVIEW

【監督インタビュー】
マウス・オブ・カーペンター

現れた黒いトンネルなどが、喉のような細長く奥行のあるセットになってるんですね。
「その通りです」
——監督にとって、この映画の新しいチャレンジとは何でしょう。
「このストーリーは、ホラー作家が中心になっているわけですが、彼が書く小説が現実になり、彼自身が“神”のような存在になっていく。これって難しい観念で、観客にこれを理解させるのが、新しいチャレンジだと思ったのです。これは伝統的なホラー映画でなく、全く新しい前進的でラディカルな作品です。だから観客にこれを理解してもらうのが大変難しいことだと思いました」
——『マウス・オブ・マッドネス』は、観客の感性によって様々な恐怖の要素が内在していますね。まずトレントの妄想によって作られた狂気の世界という解釈です。それと闇の世界による人間界への侵略を描いた人類終焉の世紀末映画という判断です。とにかく最初に見た時は、精神的に不安定な感覚に陥りました。最初から、このような斬新なホラー映画を作ろうと思っていたのですか。
「そうです。トレントは本当に狂っていて、すべてが現実の話でないと見ることもできるし、ケーンの書いたものが現実の話で、トレントは狂っていないんだって見ることもできる。一つの作品の中に幾重もの構造を持っています……そこに大変魅せられ創造しようと思ったのです」
——今までのカーペンターのホラー映画よりワンランク上をゆくホラー映画だと感じます。
「『2001年宇宙の旅』はSF映画をレベルアップさせましたが、私はこれでホラー映画のレベルアップを図りたかったのです」
——ラブクラフト・タッチの映画にすることで、気をつけたポイントはありますか。
「私は8、9歳頃からラブクラフトの小説を読み始めました。これがラブクラフトの神話世界です。“人類より太古の種族。それは他の次元や他の世界からやってきた侵略者たちで、一時は地球を支配していた。でも滅亡して我々の世界から追いやられてしまったのです。再び私たちの地球を奪環しようと密かに望み、そして復活するのです”　これをクトゥルー神話といい、モンスターの神クトゥルー伝説なのです。これを表現したかったのです」
——それでは『マウス・オブ・マッドネス』は、様々な作家がラブクラフトの小説に触発されて書いたクトゥルー神話なる小説を発表していますが、これはジョン・カーペンターによるクトゥルー神話なのですか。
「はい。これは自分にとってのクトゥルー神話で、サター・ケインのモデルはラブクラフト自身。恐怖小説“マウス・オブ・マッドネス”はネクロノミコン（地球に人類が生まれる前の旧支配者や邪神たちを記録した書物）に匹敵するものです」
——ラブクラフト映画は数多くありますが、これがラブクラフトの映画だって言えるものはありますか。
「ラブクラフトの小説を忠実に映画化した作品は今までないと思います。映画化するのが大変難しい作品で、彼の小説は叙述された……書かれたものを越えた恐怖なんです。恐怖の叫びを映像にする必要があり、それをどうして映像にすればいいのか？　だから正しく作られた作品はないと思っているので、好きなラブクラフト映画はない。ラブクラフトの恐怖というのは、頭の中に作用していく恐怖であり、私はそんなラブクラフト小説まんまの恐ろしい作品を作りたいと思ったのです」
——人々が狂気に陥ってしまう小説とはどんな本だと思いますか。
「それはラブクラフトの小説であり、何冊かあげるとするならば、“闇をさまようもの”“異次元の色彩”“ダニッチの怪”です」
——ラブクラフトは夢を見て、よくメモに残して創作に利用したようですが、あなたは夢を見てアイデアを得ることはありますか。
「夢を見て映画のアイデアに使えればいいんですが。ルイス・ブニュエルやダリオ・アルジェントのようにね。残念ながら私の夢はくだらな過ぎて映画には使えないんです（笑）」
——ジョン・トレントをパラノイアにおいやったものとはなんでしょう。
「トレントはとても皮肉屋で疑り深いんです。ホラー小説を読んで、怖がる人を理解しないし、でもそれが次第に現実となり、彼の精神世界は崩壊してゆく。観客を代表するような主人公の心を逆転させることは非常に楽しい」
——闇の世界というのは、何かのメタファーなんでしょうか。例えば、闇の世界が現実を動かしているとも取れます。ケーンの本によって暴動や警官の暴力が起きているし、我々が住む現実にもそれは起きています。
「そう言えるところもあります。ただしアメリカには大きな論争があって、テレビや映画で描かれる暴力が、現実に人々に影響を与えているという意見がありますが、私はそれを信じていません。ただしここでは、ファンタジーが現実になってしまうんで、そういう意味ではメタファーかもしれません。でも願わくば、それが全てだとは思わないで欲しい。できれば考える前に叫んで欲しいね」
——カーペンター映画には教会や宗教、神が度々出ますが、それはなぜですか。『マウス・オブ・マッドネス』にもビザンチン調の不気味な教会が出ています。
「私自身宗教に対する、自分の考えを述べようと思った気はありません。話の中でケーンが悪になり、歪んだ神、邪神となる……それで



彼の意見は映画の中で述べさせましたが、私の意見というわけではありません。個人的にはすべての宗教に対して懐疑的ですが……」
——今回、怪物がたくさん出ますが、闇の中で蠢き、露骨に見せていませんね。普通の監督だと、いかにもこんな怪物を作りましたって感じで全てを見せていますが。カーペンター流の怪物を描くポリシーとは何ですか。
「その方が大きな影響が観客に与えられます。見せるよりも、見せない方が何か影で蠢く恐怖を与えます。それはラブクラフトが言葉を使って恐ろしさを抱かせるような効果です」
——イマジネーションを刺激させるということですね。
「想像力というのは目に見えるものを見て働くものじゃないよ」

——それでは露骨に怪物を見せる作品に対しては、どのような考えをお持ちですか。

「私は『遊星からの物体X』で明るい場所に登場する怪物を撮ったけど……ストーリー次第だよ。観客に与える影響力というのは、ストーリーによって違ってくるからね。ただし見せるからにはものスゴク出来が良くて、ものスゴク怖いものでなくてはならないんだ。『遊星からの物体X』が終わった後、私は考えた。“神よ、これ以上、何をしたらいいのか?”と。だから今回は、別の演出法で恐怖を表現したかったのです」



——ラストで街全体が廃墟と化し、『マウス・オブ・マッドネス』を上映している映画館が映し出されます。見た人によって様々な解釈が成り立ちますが、あなたはどのような意図を考えたのですか。

「私の意図は、観客それぞれが想像するものを正しいと思ってもらいたいのです。あなたが感じ取るように考えればいいのです。精神異常者の妄想なのか、現実の出来事なのか、自分が感じ取ることによって、自分が信じることが見えてくるハズです。ここには悲観的でとても不条理があると感じるかもしれませんが……。また私は映画の中にある映画が好きで、ホールの中にある鏡のような存在で、どれが現実でどれが現実ではないのか、分からなくなってしまう……一種の幻覚作用を働かせる意味合いがあるんです」

——カーペンターの演出法とは、簡単に言ってどんなスタイルですか。

「INTUITION(直感)です。予定されたものではなくて、創造する時に無意識の中から生まれ、考えるままに演出していくのです」

——カーペンター映画は、最初に劇場公開されたバージョンがいつもディレクターズ・カットになっています。その点についてどう思いますか。(『マウス・オブ・マッドネス』は、一般観客に対し、少し難解な部分があるため、再編集するという噂が一部で流れた)

「時に監督というのは、撮ったものを全部入れたがる人がいますが私はそうしない。カットして作品が良くなれば遠慮なくカットする。ストーリーが一番大事だから、自分のエゴや栄光みたいなものは気にしない。私はストーリーを語るために映画を作るんです」

——メジャー大作というのは映画を観ている時はカタルシスを与えてくれるけど、観終わった後しばらくすれば消えてしまいます。私にとってカーペンター映画は観終わっても、インパクトを受け、心の中にいつまでも残り、考えさせるパワーがあります。カーペンター監督にとって、映画って何でしょうか。

「映画っていうのは、どんなスタイルでも有り得ると思います。一つのモノであるとは決してないと思う。娯楽でも、感動でも、恐怖でも、喜びでも、愛でも、ショックでも、叫びでも有り得る……とても感情的なモノ。恐ろしくて取り憑かれ何日間も映画の一部分のことを考えて忘れられない映画もある。いい映画、素晴らしい映画というのは、心の中に永く留まるものだと思います」

——最後に日本の映画観客にメッセージを欲しいのですが……。

「黒澤明監督はかつて言っていました。“映画監督にメッセージがあるとすれば、看板を持って見せればいい”ってね。映画監督にメッセージはない。全部映画の中に入っている。映画を見て欲しい、映画を見て楽しんで死ぬほど怖がって欲しいのです」



『マウス・オブ・マッドネス』の魅力は、様々なシーンやセリフから、観る者のイマジネーションを刺激し、カーペンターが描く狂気世界が膨らむような構成になっています。よってそれぞれの場面やセリフの解釈は、観客によって異なります。私の個人的な主観を最後に一つ言わせてもらえれば、我々が観ている映画『マウス・オブ・マッドネス』自体が、ケーンの執筆した狂気小説“マウス・オブ・マッドネス”であり、新世界のニュー・バイブル、そしてケーンが作った狂気を生むメディア「マウス・オブ・マッドネス」なのです。別の見方をすればカーペンターが作ったネクロノミコンでもあるが(分かるかな)。

とにかく『マウス・オブ・マッドネス』の恐怖の衝撃度は、観る者のイマジネーションの限界に比例してくるのである。これはスゴイ、もう映画じゃない。







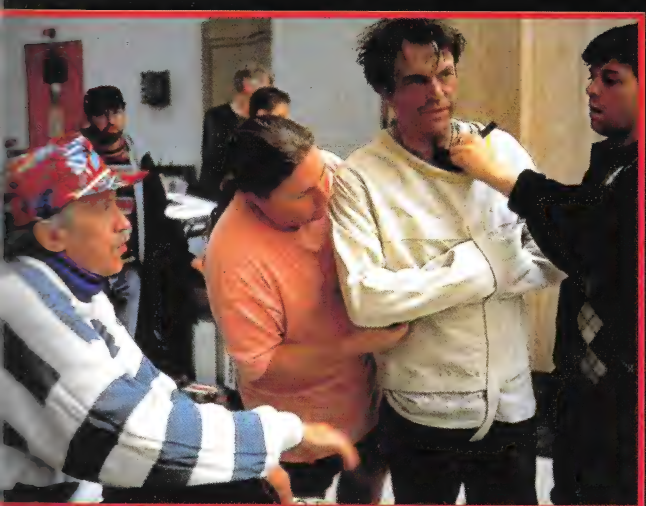


In The Mouth of Madness











IN THE MOUTH OF MADNESS



PRODUCTION NOTES

■プロダクション・ノート

「ジョン以外にこの映画を撮れる監督はいない」とデ・ルカ氏はこのプロジェクトへの思い入れを語る。これはデ・ルカのNew Lineでの2本目の脚本作品である。(ちなみに1番目は「エルム街の悪夢 ザ・ファイナルナイトメア」) カーペンター監督は、「マイケルが脚本をもって僕のところへやってきた。素晴らしい脚本だったよ。僕の他の多くの作品とジャンル的には同じだったけど新しいチャレンジだと感じたね」と言っている。

カーペンター監督は、「サムともう一度仕事ができたのはとても良かった。彼は素晴らしい俳優だ。僕の仕事を楽にしてくれる」と最後に付け加えた。デ・ルカは、1991年のコメディスリラー「透明人間」をヒットさせた後、映画関係者たちと再び集い、最近では商業的にも成功した作品「ジュラシック・パーク」や「ピアノレッスン」に出演し、その演技が批評家に受け入れられたこの映画の出演者サム・ニールに関しては、カーペンター監督と同意見であった。デ・ルカは自信をもって語る。「サムの起用はこのプロジェクトの格を上げるものだ」

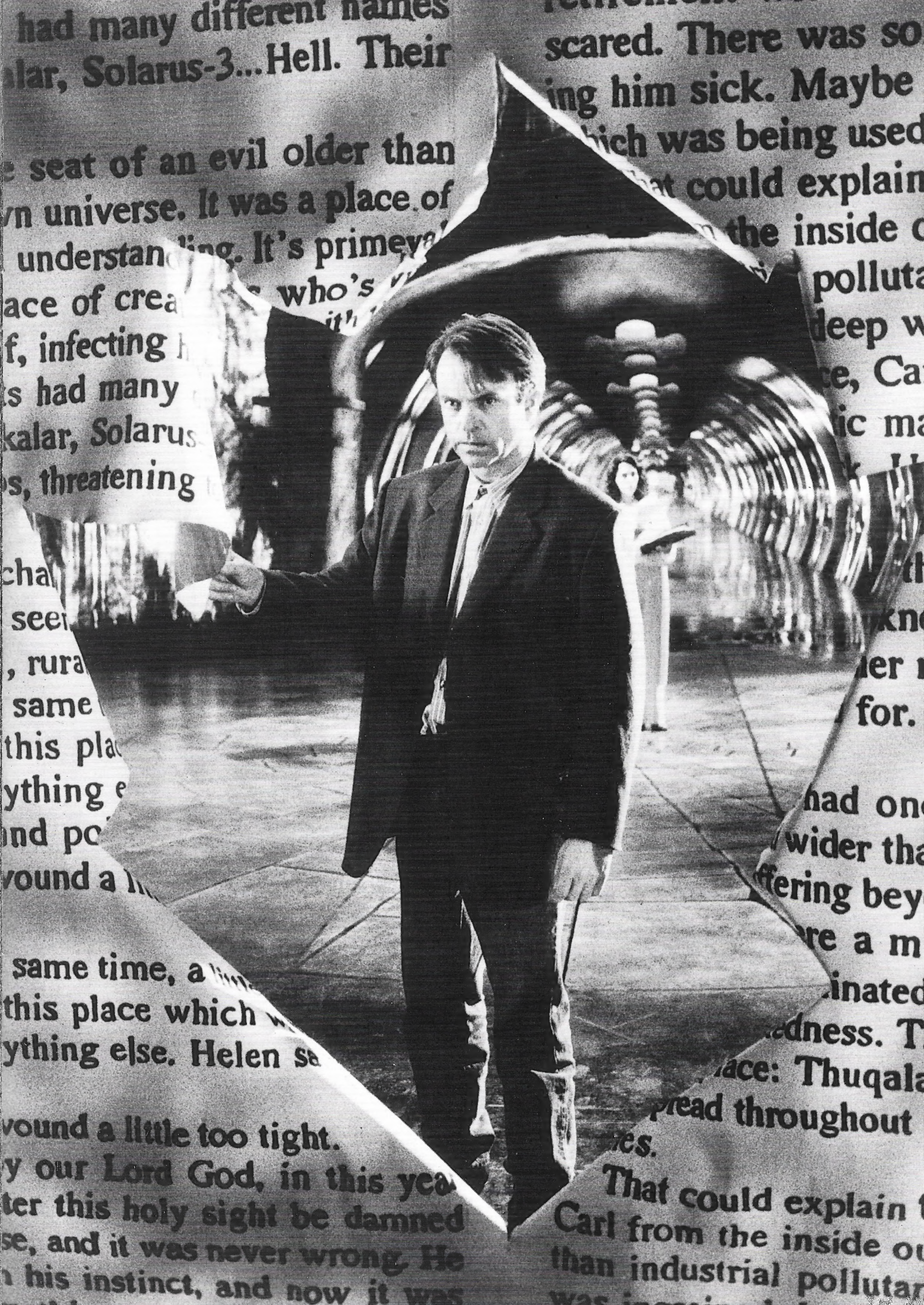


さらにこの映画には2つのハリウッドの大御所SFXワークショップである、アカデミー特殊効果を獲得したIndustrial Light&Magic社と、業界トップクラスの特殊効果デザイナー集団であるKNB EFX Group社が参加していることを忘れてはならない。

カーペンター監督の映像を活かすために、ILMはこの映画の視覚効果及びデジタル・コンピューター・グラフィックス、映画の中に登場する絵画や、予言者である作家の究極の運命といった特殊効果のスーパーバイザーとなっている。KNBの魔術は、特殊メイク、ミニチュア、20人で操作する18フィートの怪物に活かされている。この特殊な怪物は非常に大きく、KNBがあるロサンゼルスの倉庫からトロントの撮影現場まで列車で輸送された。

美術監督のジェフ・ジンもまた素晴らしいセットや、ケインの黒い教会のインテリア、プラスチックでブラック・オニキスに似せて作った建造物を製作し、撮影カメラマンのゲリー・キッビがそれを裏から光を当て、映画のクライマックスで奇妙な生物のような質感を出している。

製作は8月23日から10週間かけて、ニューヨークシティやトロントの町をいくつかロケーションしながら行なわれた。ケインのホラー小説に描かれたHobb's Endというニューイングランドの町は、トロントから20マイル程離れた人口1200人の町ユニオンビルに設定された。



had many different names
alar, Solarus-3...Hell. Their
seat of an evil older than
n universe. It was a place of
understan
ace of crea
f, infecting
s had many
kalar, Solarus
s, threatening
scared. There was so
ing him sick. Maybe
hich was being used
could explain
the inside
polluta
deep w
e, Ca
for.
had one
wider tha
fering bey
re a m
inated
dness. T
ace: Thuqala
pread throughout
That could explain
Carl from the inside o
than industrial pollutar
same time, a
this place which w
ything else. Helen sa
wound a little too tight.
y our Lord God, in this yea
ter this holy sight be damned
se, and it was never wrong. He
his instinct, and now it was

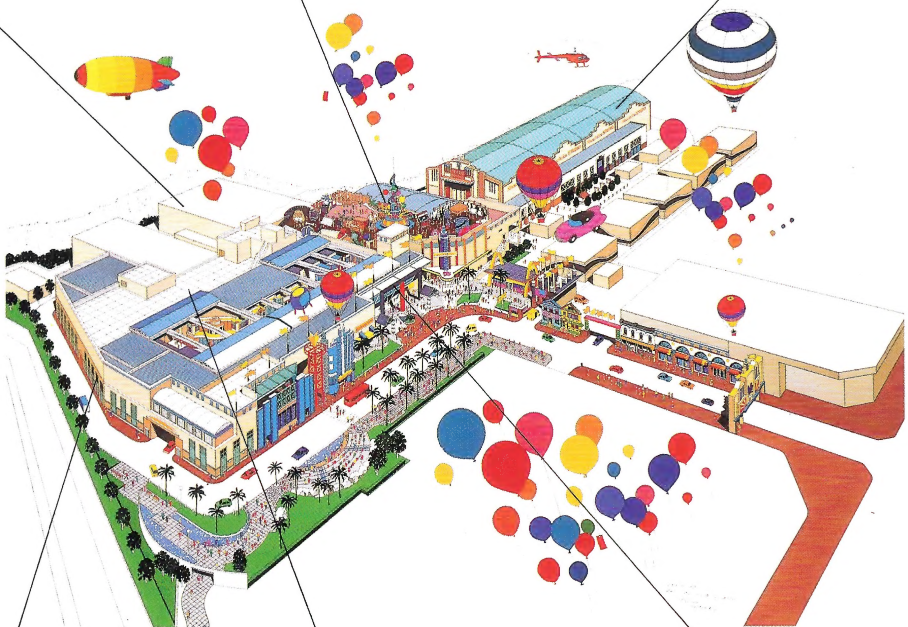
映画のテーマパークができます。

【オープンは10月10日です】

●見学スタジオ
ここでは生の撮影現場が見学できます。
スタッフの息づかいさえも伝わる、
そんな現場の緊張感を肌で感じて下さい。
また、ここでは様々な大型イベントも
企画しています。

●日本映画ゾーン(時代町)
1階の南側には、
お堀が流れ、柳がそよぐ時代劇の町
――江戸時代の京都を再現しました。
お化け屋敷や芝居小屋風レストランも
あわせてお楽しみいただけます。

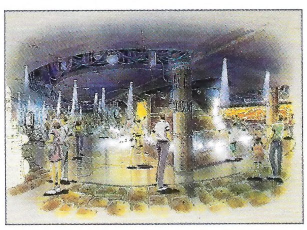
●No.1～4スタジオ
この大きな建物は、
通称「かまぼこスタジオ」。
名前の由来はもちろんその形からです。
半世紀以上の歴史を持つこのスタジオは
「君の名は」「秋日和」など日本映画を
代表する名作を生み出しました。



●日本映画ゾーン(柴又界隈)
1階の北側には
「男はつらいよ」でお馴染みの
葛飾・柴又の帝釈天参道が、
映画ならではのトリックを
使って再現されています。
また、この階では映画の全てが
わかる「シネマファクトリー」も
ご覧いただけます。



●未来映像ゾーン
3階はフロアー全体が、
ある惑星という設定です。
ここでは最新の映像技術と
空間演出により創り上げた
未来映像の世界を「体感」
いただけます。



●アメリカンシネマゾーン
館内に1歩入ると、そこは夢の都ハリウッド!
1950年代をイメージしたストリートには
アメリカ映画のキャラクターグッズを
集めたショップもオープンいたします。



「東京物語」「君の名は」などの名作を生んだ松竹大船撮影所に
この秋、新しく屋内型 テーマパーク がオープンします。創業百
年の実績と最新の映像技術、そして海外との深いネットワークを
活かした、映画を五感で楽しめるまったく新しい世界。それが、
日本初のスタジオテーマパーク「鎌倉シネマワールド」です。

Cinema KAMAKURA World

鎌倉シネマワールド

松竹株式会社　鎌倉シネマワールド営業宣伝室
〒104　東京都中央区築地1-13-5　TEL03-5550-1391

百年 松竹

〈CAST〉

JOHN TRENT……………SAM NIELL
RINDA STYLES……JULIE CARMEN
SUTTER CANE…JURGEN PROCHNOV
YARBROUGH………JOHN GROVER
JACKSON HARGLOW………CHARLTON HESTON
DR. WRENN…………DAVID WARNER
ROBINSON……………BERNIE CASEY

〈キャスト〉

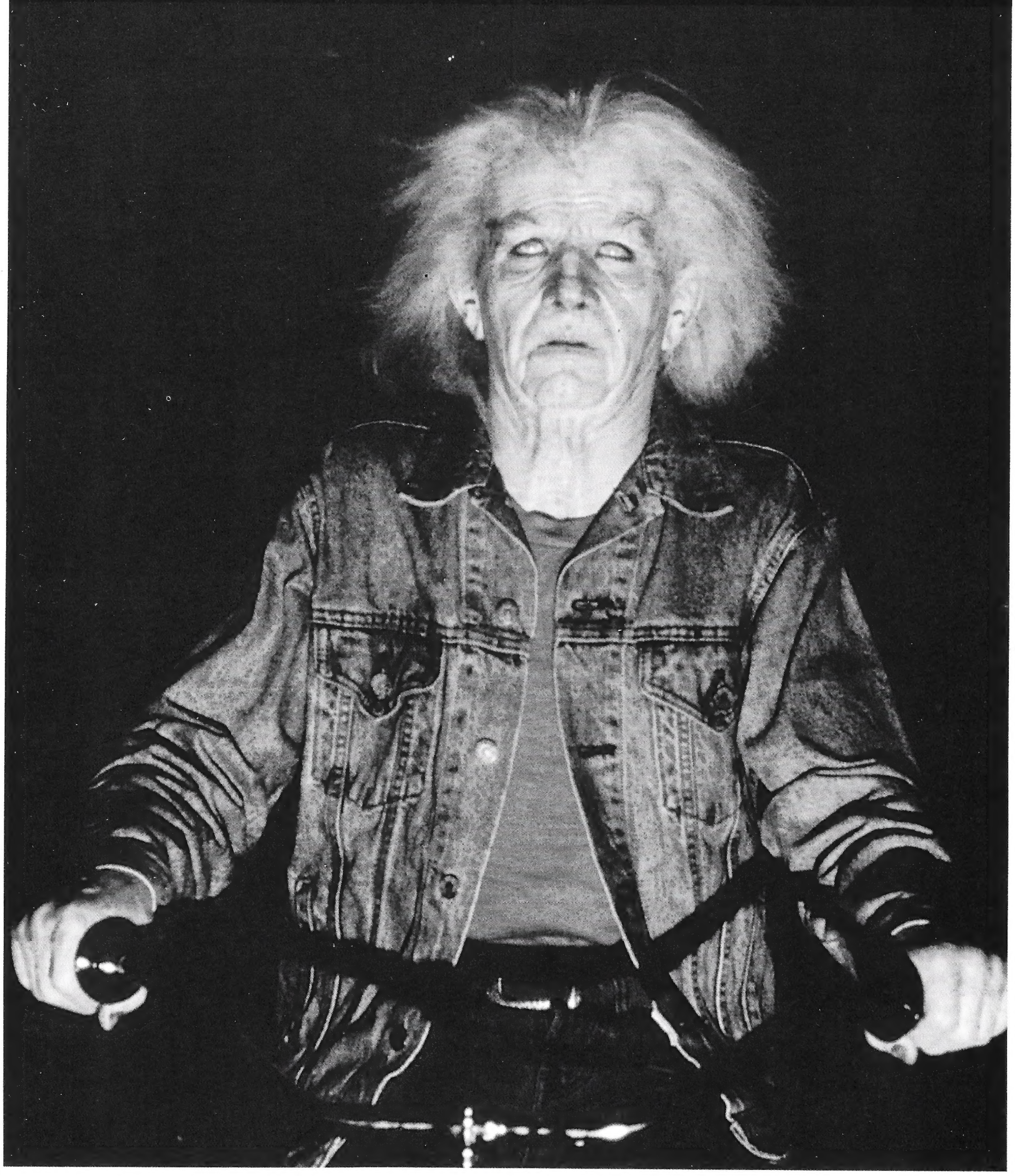
ジョン・トレント……………………サム・ニール
リンダ・スタイルズ………………ジュリー・カーメン
サター・ケーン…………………ユルゲン・プロホノフ
ヤーブロウ……………………ジョン・グローバー
ジャクソン・ハーグロウ……チャールトン・ヘストン
ウレン博士……………………デヴィット・ワーナー
ロビンソン……………………バーニー・ケイシー

〈STAFF〉

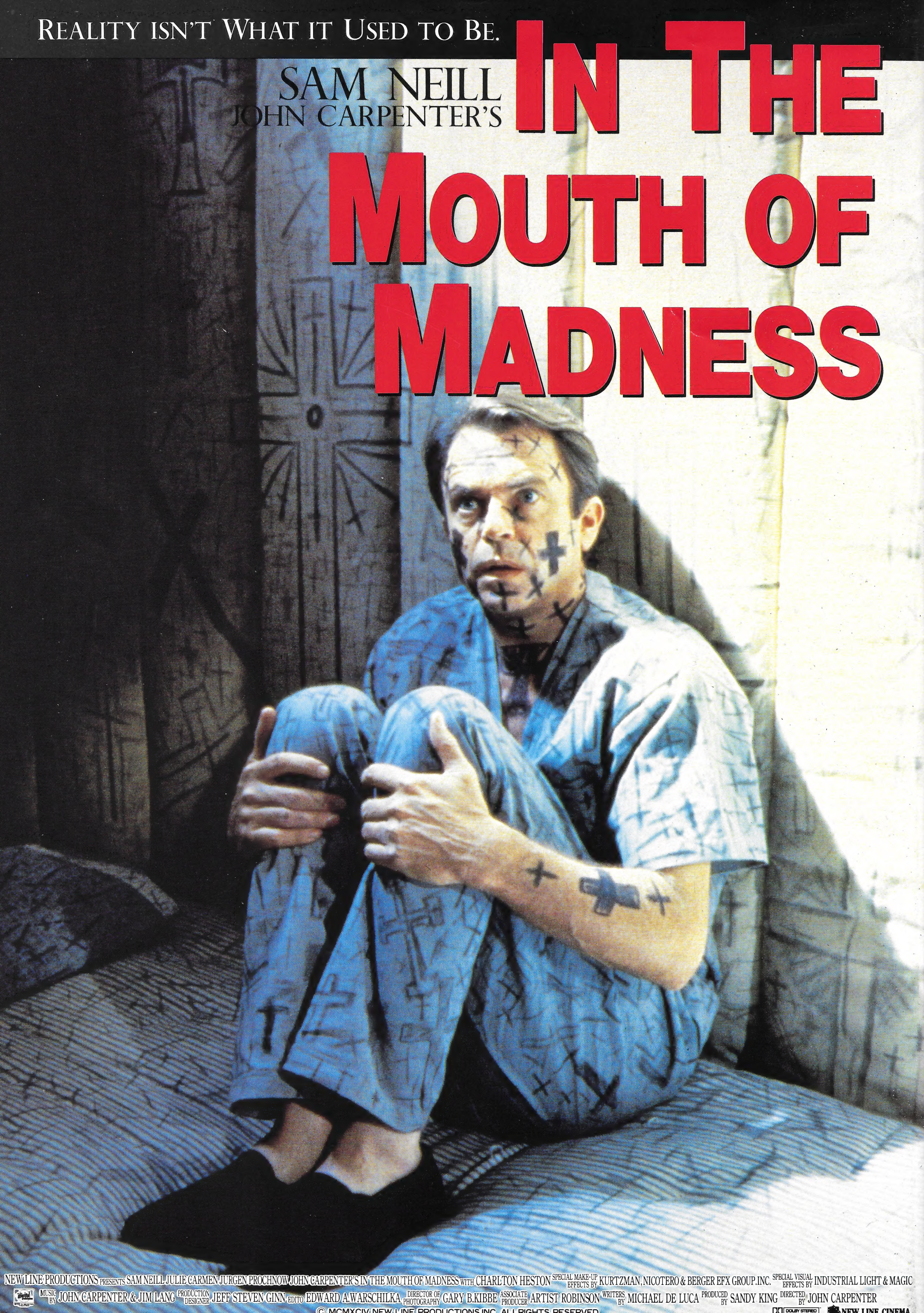
SPECIAL MAKE-UP EFFECTS by……………KURTZMAN NICOTERO&BERGER EFX GROUP,INC.
SPECIAL VISUAL EFFECTS by…INDUSTRIAL LIGHT&MAGIC
Music……………JOHN CARPENTER&JIM LANG
Production Designer…………JEFF STEVEN GINN
Editor……………………EDWARD A WARSCHILKA
Director of Photography…………GARY B.KIBBE
Associate Producer…………ARTIST ROBINSON
Written by……………………MICHAEL DE LUCA
Produced by……………………SANDY KING
Directed by……………………JOHN CARPENTER

〈スタッフ〉

特殊メイク……………………KNBエフェクツ
特殊効果………インダストリアル・ライト&マジック
音楽…………ジョン・カーペンター&ジム・ラング
プロダクション・デザイン……ジェフ・スティーブン・ジン
編集……………………エドワード・A・ワーシルカ
撮影監督……………………ゲイリー・B・キッビ
共同製作……………アーティスト・ロビンソン
脚本……………………………マイケル・デ・ルカ
（ノベライゼーション：学研ホラーノベルズ刊）
製作……………………………サンディ・キング
監督……………………………ジョン・カーペンター



平成7年5月13日発行●発行承認/松竹富士株式会社●編集・発行/松竹株式会社事業部●定価400円（税込み）


REALITY ISN'T WHAT IT USED TO BE.
SAM NEILL
JOHN CARPENTER'S
IN THE MOUTH OF MADNESS
NEW LINE PRODUCTIONS PRESENTS SAM NEILL JULIE CARMEN JURGEN PROCHNOW JOHN CARPENTER'S IN THE MOUTH OF MADNESS WITH CHARLTON HESTON SPECIAL MAKE-UP EFFECTS BY KURTZMAN, NICOTERO & BERGER EFX GROUP.INC. SPECIAL VISUAL EFFECTS BY INDUSTRIAL LIGHT & MAGIC
MUSIC BY JOHN CARPENTER & JIM LANG PRODUCTION DESIGNER JEFF STEVEN GINN EDITO EDWARD A.WARSCHILKA DIRECTOR OF PHOTOGRAPHY GARY B.KIBBE ASSOCIATE PRODUCER ARTIST ROBINSON WRITERS BY MICHAEL DE LUCA PRODUCED BY SANDY KING DIRECTED BY JOHN CARPENTER
© MCMXCIV NEW LINE PRODUCTIONS INC. ALL RIGHTS RESERVED
DOLBY STEREO
NEW LINE CINEMA